

## 定例研究会報告要旨

第2025 回定例研究会報告要旨(10月5日)

## 我々の社会における『安心』と『リスク』 -主として「食」の問題を題材に-

神里 達博

近年,我が国においては,地震や水害などの天災,鉄道などの人為的事故,BSEやO-157といった健康問題など,広い意味での「安全」を脅かす出来事が頻発してきた。そのため「安全」「安心」「リスク」といった言葉は,時代のキーワードとして定着してきている。これらは非常に基本的な概念であるがゆえに,それ自身が改めて省みられることは、さほど多くはないが,実のところ,それぞれ異なる背景を持った言葉である。

今回は、1)上記の概念を若干丁寧に検討することを試み、2)また、主として「食」の問題をその具体的事例として取り上げた。更に3)近年のリスク政策のモデルを一部紹介し、議論の契機となることを狙った。ここでは紙面も限られているので、以下、1)についての概要のみを述べたい。

## 1. 「安心」

文部科学省が設置した「安全・安心な社会の 構築に資する科学技術政策に関する懇談会報告 書」によれば、安全とは「人とその共同体への 損傷、ならびに人、組織、公共の所有物に損害 がないと客観的に判断されることである」とし ている。一方で「安心」については、「個人の 主観的な判断に大きく依存するもの」とし、い くつかの見解を示しながらも、そこで明確な定 義は行っていない。少なくとも「安心」は「安 全」に比して主観性の高い概念であることは間 違いない。これは、元々「安心」の語が仏教用 語に起源を持つことからも了解しうるだろう。

近年、この2つの言葉は公共的なシーンにおいて「安全・安心」として一括りで語られることが多くなった。したがって、そのことの背景・影響を検討しておくことは重要であろう。簡潔に述べるなら、「安心」は客観的な

指標を立てにくいがゆえに、それが一旦政策 目標などになると、どこまで「安心」を追求 すべきかという基準が立てにくい。このこと は、「安心」と例えば「自由」や「(新しいも のへの)挑戦」、また「多様性」といった他の 価値を侵食する可能性があることを意味する。 では、どうすべきか。「何事もバランスは重要 である」というのは陳腐な結論だが、しかし、 依然として重要な観点であるのは間違いない。 2.「リスク」

一方、「risk=リスク」は言うまでもなく外来語である。実は、この語は近代的な精神と結びつきが強く、17世紀頃に登場した比較的新しい言葉である。より古い類義語としてdangerがあるが、最も大きな違いは、「リスク」には「人間が進んで何かに挑戦する」という含意がある点だ。すなわち、「自由」と「リスク」はコインの裏表の関係なのである。自由の無いところにはリスクもないのだ。したがって、科学技術が進み、人間の手にする自由・可能性が増せば増すほど、「リスク」は増えるというアイロニーがここに存在する。

さて、我が国においてこの言葉が使われる 場は、主として貿易や保険などに以前は限定 されていた。しかし、新聞紙面の定量的な分 析からも、この語が1990年代後半に一般的 な用語として定着したことが推測できる。こ れは、いわゆるグローバル化の波に日本社 会が晒された時期とも一致し、その意味で、 「リスク」はいわゆる「第三の開国期」に上 陸してきた概念だとも言える。だが、我々は この言葉をまだ自らの歴史的文脈の中に位置 づけることはできていない。未だに「カタカ ナ」で表記されていることも、その1つの傍 証であろう。今後、我々の社会がいかなる方 向に進むかにも大きく依存することだが. こ の言葉をたとえば「虎穴に入らずんば虎児を 得ず」や「覚悟」といった使い慣れた言葉と 比較しつつ、我々の社会にとってのその意味 を再検討しておくことは、ますます「リスク 社会」の様相が深まる中にあって、重要なこ とではないかと思われる。

主要文献: 神里達博『食品リスク-BSEとモダニティ』(弘文堂, 2005), 神里達博「社会はリスクをどう捉えるか」(『科学』10月号, 岩波書店, 2002), 神里達博「安全・安心言説の登場とその背景」(『科学技術社会論学会誌』,玉川大学出版部、Vol3, 2004)

(文責:高橋克也)